
俺と半透明な彼女の日常

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と半透明な彼女の日常

【Nコード】

N1465BA

【作者名】

アルト

【あらすじ】

これはどこかの町のどこにでもいるような大学生のお話。

その大学生、名を長門宗助と言うのだが、彼には人には言えない秘密がある。見える人、いわゆる霊能力者と呼ばれるこの世ならざる存在を見て、聞いて、感じるこの出来るこの現代では人々が失った力を持つ希少な存在だった。

そんなある時色々な事情により宗助は亡くなった祖母から譲り受けたとある屋敷に住む事になったのだが、まさか新しく住む事になった家に鎖に繋がれて成仏出来ない幽霊がいるとは予想さえつかなか

った。

「お、お帰りなさいませご主人様！」

「誰がご主人様だ！」

これは見えちゃう人、長門宗助と成仏出来ない幽霊、葉月のちよつとした日常のお話

シーン0 始まりの始まり

俺と半透明な彼女の日常

シーン0 始まりの始まり

この世には二つの存在がある。一つは普通に生活し人と会話し何かを思いそれに準じて生きている者、もう一つはすでにその役目を終え旅立つべき者であるがこの世に未練を残し、旅立つことが未だ出来ずにいる者の二通りの存在がいる。

すなわち、幽霊と呼ばれる存在だ。

この者達は普通の人々には見ることも触れることも感じることも出来ない。まだ人間が彼らのことをよく理解しているときにはそれが当たり前だったらしいが、今ではその力の片鱗すら見ることは出来ない。

しかし、ごく稀にその力を今でも行使することが出来る人間がいる。それを人は霊媒師または、霊能力者と呼び崇め時に恐れた。

今、この話の主人公でもある、長門宗助の前にもそのこの世ならざる存在、いわゆる幽霊と呼ばれる存在が目の前にいた。宗助もまたこの時代には珍しい霊能力を持った貴重な存在ではあるが、その宗助はたった今日の前で起きている現状に困惑を隠せなかった。

目の前には確かに幽霊と呼ばれる存在がいる。しかし、その幽霊は宗助が今までに見たことがないぐらいに奇妙だった。

年は16、7ほどの少女、髪は長く腰の辺りまで伸ばされた黒髪はその毛先までもつややかに光っていた。服装は彼女らによって様々だったが、なぜか目の前の彼女は巫女服を纏い、どういいうわけか左足には罪人が着けるような足枷と見た目からして重厚な鎖がついて

いた。しかし、その鎖も足枷からわずか30センチほどのところで断ち切られており、すでにその役目を終えていた。

ちなみにではあるが、宗助が困惑しているのはその幽霊少女が原因ではない。もちろん、彼女を最初に見たときも困惑を隠せなかったが、今の宗助はそれ以上に困惑していた。

「……ところでお前は何をしてるんだ？」

「おはようございます宗助さん。もう少しで出来上がるのもうちょつとだけ待っていてくださいね」

「いやそうじゃなくて……」

宗助はそれ以上言う気にはなれなかった。のほほんと返す彼女に対して宗助はなんでこんなことになっているのだろうか？ と首を捻る他なかった。

幽霊少女こと名を葉月という見目麗しい少女（幽霊だが）は鼻歌を歌いながら上機嫌に朝食を作っていた。ただ、目の前のそれは明らかに朝食と呼べるものかは疑問だった。

「今日はですねーじゃーん！ パンケーキです。おいしそうですねー朝から頑張っちゃいました」

「確かに頑張ったみたいだな。ただな、一言だけ言わせてくれ」

宗助はそつとため息をつきながら目の前の現状に頭を悩ませる。

「いくらなんでも作りすぎじゃないか？」

ダイニングテーブルのそばに置いてある椅子に腰を下ろしながら言う。テーブルの上に置かれた皿にはパンケーキが乗っかっている。それも一枚や二枚じゃない。軽く見積もって十枚はある。それも一枚の皿に対して十枚だ。そしてそれがどうやら一人分らしい。

漫画や何かでこんな光景を目にしたことはあるが、実際に目にしてみると、なんというか……

「えへへー宗助さんに喜んでもらえて光栄ですー」

「……喜んでねーよ」

「あつ！？ もしかして量が足りなかったですか？ じゃあすぐに追加を……」

「……朝からこんなに食えるかって言いたいだけだ。……ったく、家にあつた小麦粉全部使いやがって。卵も……買ってきておかないとな」

「何を言うですか、糖分は脳を働かせる栄養源としてとっても重要なんですよ。葉月はですね少しでも宗助さんのことを思つてと……」
「ああ、そうかい、それはありがとよ。でもな、物には限度つてもがあるんだ。でもなこれはいくらなんでもこれは多すぎだろ」

宗助は朝からげんなりした。どうにも葉月はいつも想像の斜め上をぶつちぎって行動する癖がある。放置しておくで大抵ろくな目には遭わないことを宗助は彼女とのそんな短くもなく、かといってそれほど長くもない同居生活で学んでいた。

はあ……と、ため息交じりに何かを諦めた様子で宗助は冷蔵庫からいつもの通り牛乳を取り出すと、キッチンの棚に置いてあつたコップになみなみと注ぐ。幸いにも牛乳だけはなんとか残つていたみたいで、それを飲み干すと低血圧な頭がようやくはつきりとしてくる。横では「ぐす……宗助さんに喜んでもらえると思つて頑張つたのに……」とへこんでいる幽霊一名がいるが、出来るだけ気にしない様にしながらやり過ごそうとする。

しかし……今日の朝食は牛乳だけで済まそうとしている宗助をよそに葉月は目の前に積まれたパンケーキを食べながら「……おいしいです……やっぱりパンケーキはいいですね……ハチミツもたっぷりかかつて甘いはずなのに……あれ？ どうしてでしょうか……このパンケーキしょっぱいですね……もしかして、砂糖と塩を間違えたでしょうか……ぐす……」と、明らかに宗助に聞こえるぐらいの声で呟いていた。白々しいことこの上ない。そんな葉月に宗助は内心、うぜえ……と、思った。

未だぐすぐすと鼻を嚙りながらパンケーキをちびちびと食べる幽霊を横目で見ながらため息一つ、そしてとうとう宗助は観念した。正直に言えば幽霊相手に慰めの言葉なんているのか？ なんて思いはしたが、どうせ放っておいてもろくなことにはならない。仕方無

しに頭に手を置いていつものように言ってる。

「……葉月、俺が悪かった。そうだな、葉月はこんなに頑張ってくれたんだな。ありがとう。さ、俺もパンケーキが食いたかったんだ。冷めないうちに食べようか」

宗助としては大して感情もこもっていないただの棒読みの台詞を並べ立てただけだったのだが、葉月にとっては効果観面で「あう、宗助さん！ はい、食べるです！」と言うと、葉月はずーんと落ち込んだ表情から一転、枯れた大地に太陽が刺したような顔をするとうきうきとテーブルについた。まさにうきうきウツチングだ。それを見て宗助は「朝から面倒くせえ……」と、呟いた。

ちなみにだが、この話の主人公でもある宗助がこんな目に遭っているのには少なからず理由があった。それを事の始まりなんていうと格好よく聞こえる気もするが、宗助がこんな目に遭う要因となったことを考えると、実際にはそんなにも格好のよいものではなかった。今にして思えばあれ自体も何かの陰謀として捉えることが出来るのかもしれない。それぐらいに奇妙だった。

出来すぎた出来事に関して人というものは必ず何かの理由をつけたがるものだが、今の宗助の日常は側から見れば偶然起きた出来事だおといえる。しかし、どう考えてもやはり何らかの理由をつけたくなる。そんな哲学的なことを思いながら宗助はここに引越してきたときのことを思う。

「宗助さん、コーヒー淹れましたから飲んで下さいです」

「ああ、ありがとう」

「どうしましたか？ なんだか難しい顔をされてますけど、もしかしてコーヒーよりも紅茶のほうがよかったですか？」

葉月は何か自分が粗相をしてしまったような顔をしてあわわわしていた。

「気にするな、別にお前が何かしたわけじゃないんだ。ただ、俺自身こんな目に遭ってるというのに意外と冷静でいられるもんなんだなって関心してただけだ」

「？」

目の前の幽霊は不思議そうな顔をしていたが、気にせずに出されたコーヒーに口をつける。相変わらずこの幽霊のいれるコーヒーは普段自分で淹れるものより美味かった。前に気になったので美味しさの秘密なんかを聞こうと思ったら「そんなの簡単ですよ。宗助さんへの愛がこもっているから美味しいのですよ」なんてことをぬかしてきたのでその日は一日中無視を決めこんでやった。さすがに、葉月も堪えたのか翌日には華麗なる土下座を決めて謝ってきたが。

宗助と葉月は一応は同居という形でこの家に一緒に住んでいる。元々は誰も住んでいなかった家に引っ越してきた宗助だったが、まさか新しく住むことになった家にこんな変なのがいるとは想像もしなかった。

宗助は霊能力者だ。とは言ってもこの世ならざるもの、いわゆる幽霊と呼ばれる存在が見える程度のもので俗に言う除霊といった類のことは出来なかった。それは霊媒師でもあった宗助の祖母ならば出来たのだが、宗助にはその力は引き継がれなかった。そのせいで幼い頃からこの世ならざるもの達から度々襲われることになったり、現世に生きる者達から気味悪がられることも一度や二度ではなかった。だからというわけではないのだが、出来るだけそういったことには関わらないようにしてきた。それが宗助が幼いなりに身につけた処世術だった。

しかし、やはり宗助に流れる血はそういった存在を惹きつける何かがあるようで、こうしてなし崩し的にはあるが幽霊と一緒に住むこととなってしまっている。

「お、お帰りなさいませご主人様！」

「誰がご主人様だ！」

なんて会話にすらなっていないその会話が彼女と交わした最初の言葉だった。それもなんだか懐かしい思い出のようにも感じる。

「宗助さん宗助さん、今日は葉月が一位ですよ！ なにかいいことがあるかもです！」

「……そうですね」

葉月はテレビの占いに喜びながら鼻歌交じりで上機嫌にしていた。
これはそんなちよっとだけ不思議な（いや、やっぱり結構不思議な）
幽霊とその幽霊に振り回される主人公のお話。

シーン0 始まりの始まり（後書き）

見えちゃう人の宗助と成仏できない葉月の少しだけ非現実的な日常をお楽しみください

シーン1 未知との遭遇

シーン1 未知との遭遇

「……本当にここで合ってるのか？」

男は心配そうに呟いた。

手にはこの情報社会にとってはゴミくず以下の代物でしかない地図（小学生にはじめてのおつかいをさせるために母親が書いたような地図であまりにも簡略しすぎて地図とは呼べない）とこの家の鍵が握られていた。

辺りを見回せば建てるのに一体いくら位かかるのだろうか？ と言いたくなるようないわゆる、豪邸と呼ばれるような大きな家がそこら中に乱立していた。

高級住宅地ということもあり、大きな塀とその中にいる大きな犬、どこの国の車かは知らないが明らかに高級車だと見た目でわかる車が何台も止まっている豪邸をいくつも見る。あるところにはあるんだなと関心しつつ、この国の富裕層と貧困層の格差を見たような気がした。

それにしても……だ。

「確かに屋敷と言えば聞こえがいいが……これは……」

彼の目の前には確かに高級住宅街らしく、それなりに大きな家が建っていた。そう、大きさだけでいえばの話だが。

無駄に大きな塀には絡みついた蔦が塀を覆いつくし、広々として綺麗だった庭は放置されて草が生え放題、真っ白い家は風雨にさらされたせいで白というよりは灰色に近い色に変化していた。

一言で言えば、廃墟。または幽霊屋敷というのがぴったりの外観だった。

「幽霊屋敷だよな……」

天の声が聞こえたのかどうかは定かではないが、どうやら彼、この話の主人公長門宗助も同じ思いだったようだ。

「……今ならまだ引き返せるか？」

そんなことを思いはしたが、残念ながら今の彼にはその選択肢はなかった。

宗助がこの古ぼけた屋敷にやってきたのはある理由からだった。

先日、宗助の祖母が亡くなりその際に財産分与が行われた。生前、宗助の祖母は残された家族に遺言を残しており、孫である宗助にはなぜかこの屋敷が与えられたのだった。

当初、宗助はこの屋敷を相続するのを断ろうと思っていた。しかし、この屋敷が建っているのは偶然にも宗助が通う白峰大学の近くなのと、実家に帰っていた際に借りていたアパートが全焼してしまふという不幸が重なったために仕方なくこの屋敷に住むことになったのだった。

話に聞いていたときはちゃんと管理してある屋敷ということだったが、実際に実物を見ていなかった故の多少の不安はあった。しかし、これはその多少の不安というものを遥かに逸脱していた。

しばらくの間逡巡を繰り返していたが、ついに意を決したようでは塀に備え付けられてる鉄格子をそつと押すと、錆びて朽ち果てている割にはすんなりと開いたことに驚きながらも中に入ってしまった。

塀から家までのわずか数十歩のところには石畳が敷かれており、この住宅が元々はそれなりに素晴らしい住居だったことを感じさせた。石畳のおかげで草をかき分けながら進むということはなかったが、外観から見てもあまりよろしくはない。どうやら草むしりをするのは必至だった。

家のドアの前に立つと、ドアには何かの装飾だろうか？あまり芸術だとか美術的センスはない宗助にも匠が彫ったとわかるような彫刻が施されていて、この家の元々の高級感（今は見る影もない）を感じさせていた。

ポケットから鍵を取り出すとそれをドアノブの下にある鍵穴に差

し込む。鍵自体も年代物のようで今のご時世それこそプロの方ならわずか瞬きする間に開けてしまいそうなくらいにセキュリティーとは縁遠い構造だった。

カチャ、と小気味のいい音とともに長い間かかっていた封印を解くかのように鍵が開錠される。ギイイ、立て付けの悪い建物のような音を出しながらドアを開くと中は埃塗れの様相か？ と想像していた宗助の予想を見事に裏切り、意外にも中はとても綺麗に掃除されていた。

それこそ、ついさっきまで誰かが住んでいたかのように……。

一抹の不安を、持ちつつも中に踏み入れる。広々とした玄関は、靴を脱ぐスペースというものがないらしく外観同様洋風の家にといた造りとなっていた。日本人である宗助には靴を脱いで入る習慣があつたため、やや戸惑い気味ではあつたものの、初めて入る家に靴を脱ぐのも嫌だと思つていたのでこれはこれで都合がよかった。

玄関からまず最初に見えるのは広々としたロビーのような場所だった。一軒家なのにロビー？　なんて思つたが実はそこがリビングルームだった。備え付けられたソファは革張りで、どこかが破けているなどの欠点もないただただ綺麗に手入れをされているものだった。

さすがに電化製品なんかの類はなかったが、家具なんかはそのまゝになつていようでソファの他には大きな古時計とちよつとした机が置いてあつた。それらもソファ同様、壊れているとか埃が被つているということもなく、いたつて綺麗に手入れされていた。吹き抜けになつてリビングの天井は高く、そこからベランダのようになつて二階部分の部屋らしきドアが三部屋分見えた。

改めて、この家の見取り図を眺めるとよくわかるが、宗助が今いるリビングからさらに奥に進むと、ダイニングとキッチンがあるらしく、その横には風呂とトイレが備え付けられていた。そのダイニングから別の通路がありそこに対面するように二つの部屋が設けられていた。広さはいずれも六畳とまるで使用人の部屋のような造り

になっていた。

部屋の中には作業机とクローゼット、それとベッドが同じ配置でそれぞれの部屋に置いてあった。わかりやすく言えばビジネスホテルの部屋のような感じた。

吹き抜けになっているリビングから二階に上がれる階段があり、そこから上に登るとリビングが一望できる。そして、そこに等間隔で並ぶ部屋があり手前から十畳の部屋が二つと一番奥の部屋が二十畳となかなか広い部屋になっていた。

十畳の部屋には同じくベッドと机、クローゼットがありここも下の部屋と同じように最低限生活に必要な家具が揃っていた。違うとすれば部屋の広さぐらいなものだろう。ちなみに二階、一番奥の二十畳の部屋はどうやら書斎だったらしく、窓際にはゆっくりと腰を落ち着けて本を読むための机とイスが置かれており、壁一面に置いてある本棚の中にはぎっしりと詰まった本があった。ちなみになんてこんな場所にあるのかは不明だが、正しいメイドのあり方、ご主人様とのお付き合い第一章、第十三章、お兄ちゃんと呼ばせて、尽くす女になる！！なんて誰が読んでいたのかわからない本が、厚みがあり羊皮紙や革張りの装丁といったかなり高級そうな古書と同じように並んでいた。補足だが、ご主人様とのお付き合い第一章、十三章の間の第八章だけがなかった。誰かが持ち去ったのだろうか？

「……まさか、な」

宗助が言つたまさかというのは先日亡くなった祖母のことだ。さすがにそれはないと思うが……。

一通りぐると回って見たがどこもおかしな点はなかった。電化製品のほかにガスコンロや食器などのいわば消耗品に近いものはなかったが、机やベッドなどの大事に使えば長く使える家具はまるで宗助の為に用意されていたかのように置かれていた。それもまともな姿かたちで。

管理されていた。というのは宗助がこの屋敷を相続した際に聞いていた。だから、家具なんかがちゃんとした形で残っていたのはわ

かる。しかし、不思議なのは管理している人間がいるならば、外の状況はどうだろうか？

ちゃんと管理しているならば外の庭だってきれいに掃除されていてもおかしくはない。

それにおかしなことはそれだけではない。

「……なんで管理している人間がいらないんだ？」

何気なく思ったことだったが、どうにも不自然すぎる。家族はこの屋敷の存在のことはよくは知らないようだった。祖母が残した遺言には“この屋敷には管理している者がいる。詳しくはその者に聞け”としか書かれていなかった。鍵はその遺言とともに残されていた。

鍵は宗助が持っている一つしかない。

では、誰がこの家の管理をしている？

「……どういうことだ？」

ますます謎は深まるばかりだった。

考えていても仕方ない。とりあえずはこれからの生活に必要なものを買い揃えなければならない。それに外の草むしりやこの家の掃除も必要だ。中のほうはきれいに掃除されているが、外のほうは手付かずだった。

「さて、と」

そうと決まればあとは動くだけだった。まずはこの家の管理人を探すことにしよう。

宗助はこの家に入ったときから薄々と感じていた。この屋敷に存在する管理人の存在を。

「おい、この家にいる管理人とやら、俺の声が聞こえるか？俺は長門宗助、長門雪の孫にあたる人間だ。俺の祖母さんは先日死んだ。それで俺がこの家に新しく住むことになった。もし聞こえるなら姿を現してくれ」

誰もいない家に宗助の声だけが響く。側から見れば何をしているのか？と言われそうだが、宗助には人には言えない秘密がある。

この世ならざるもの、つまりは幽霊と呼ばれる存在を見て彼らの声を聞いて彼らの存在を感知できる能力。普通の人間には備わっていない能力を持つもの、霊能力者だった。

宗助がこの世ならざるものとのコンタクトを図ろうとしたが、相手のほうは聞こえているのかどうか知らないが、宗助の呼びかけには答えなかった。代わりにパシィ！という派手なラップ音が返事の代わりに言いたげに鳴り響いた。

「そうか、そっちがその気なら構わない。ならば俺にも考えがある」
宗助は仕方ないと首を振ると一目散に二階のとある部屋へと駆け上がった。

コンコンと念のたドアをノックする。もちろん相手から返事などあるはずがない。

「結構強情な奴だな。ま、幽霊の考えていることなんか俺にはわからないし、わかりたくもないがな」

一人呟きながらドアのノブを捻る。

「やっぱり開かないか」

ここは先ほど宗助が家の中を探索していたときに唯一、ドアが開かなかった部屋だった。そして、先ほどから感じている気配もこの部屋から強く感じられた。

となれば、管理人とやらがいるのはこの部屋しかない。

に、してもだ。鍵がかかっている部屋にどうやって入ろうか？

幽霊などの類であれば鍵がかかっているといまいとドアをすり抜けて入ることが出来るが、宗助には無理な話だ。いくら霊能力者だといっても、自身が透明になれるわけではない。

外側から窓を突き破って進入するか？ バ力を言え。そんなのは映画の世界だけで十分だ。ましてや、引っ越してきて早々、家の修理なんてまっぴらごめんだった。

「……と、なると」

後の答えは簡単だった。

ドンッ！！

「ちいつ、そんな簡単に開くわけないよな」
体当たりだった。

この世ならざるもの達が見える宗助ではあったが、別に変身出来るわけでもないし、ましてやすごい技が使えるわけでもない。幽霊が見える以外はごく普通の一般男性なのだ。

何度かドアに体当たりを仕掛けてみるが、ドアはびくともしない。いくら頑張っても開かないドアに苛立ちを覚えながらも一度と思い体を起こすが、次第に体力は限界に近づいていた。

ハア、ハア、と息を切らせながら、ふらふらする足をなんとか気力で立たせドアの前に立つ。

「ふう　　よし！」

宗助は柵ぎりぎりまで下がるとこれで最後とばかりに開かずのドアへと突っ込む。

と、その時だった。

「……うゝん、さつきからどんとつるさいですう」

「な!？」

「え?　　ひゃう!!」

眠そうな声が聞こえたと思ったたらさつきまでびくともしなかったドアが開いた。しかし、車は急に止まらない。という言葉その身体現しているような勢いの宗助はその勢いを止めることなく……

「……いつつ」

そのまま中にいた人物目掛けてダイブすることになってしまった。ゆっくりと体を起こすと、宗助の体の下には謎の美少女がいた。艶めく腰まで伸ばされた黒髪、陶磁器を思わせるような、かといつて病弱とまではいかないぐらいの白い肌、見た目は小柄でなぜか巫女服着用。見た目はどこからどう見ても日本人らしい容姿をしていたが、その姿は半透明だった。

明らかにこの世ならざるもの、つまりは幽霊と呼ばれる存在だった。

「おい、大丈夫か？」

「……う、ううん」

幽霊相手に大丈夫か？ もなにもないのだが、このよくわからない状況に気が動転してしまっている宗助はあたかも生きている人間相手に接するように話しかけていた。対する少女は気を失っているのかうなされているように声をかすかに漏らしていた。

「……どうやら問題はなさそうだな」

少女を押し倒しておいて問題がない訳ないはずなのだが、これは不慮の事故だと思ふこととして片付けることにした。

しかし、このまま放置しておくのも後味が悪い。いくら幽霊とはいえ女の子だ。宗助は未だに目を覚まさない少女を抱えあげるとそのまま部屋の中にあつたベッドの上に寝かせることにした。

それにしてもここは一体？

宗助は少女がいた部屋の中をぐるりと見回してみると、部屋の中にはベッドのほかに机、クローゼット、テレビ（ちなみに薄型でデジタル放送対応だった）などもろもろ生活用品が用意されていた。机の上には書斎にはなかったご主人様とお付き合い第八章が置いてあつた。どうやらこの部屋にいた少女が読んでいたようだった。

ベッドの上には女の子の部屋らしくぬいぐるみやふかふかした枕が置いてあつた。カーテンも発色のよい薄いピンク色でここが改めて女の子の部屋なんだと認識させられた。

だが、非常に残念なのは、初めて入った女の子の部屋が幽霊の部屋で、ましてや部屋に入ろうとドアに体当たりをかまし、なおかつ事故とはいえ女の子（幽霊だが）を押し倒してしまうという裁判にかけられたなら間違いなく有罪確定の行為をしてしまったことだった。

ひとしきり部屋の中を物色していると、ベッドに寝ていた少女が少しむずがるような仕種を見せた後、その閉じられていた瞳をゆっくりと開いた。

「ん、起きたか」

宗助の言葉に少女はひとしきり目をぱちぱちさせ、ガバツと起き上がる一言、

「お、お帰りなさいませご主人様!!」

「誰がご主人様だ!!」

「あうう……ご主人様ではないとすると旦那様でしょうか？」

「……俺はいつからそんなに偉い人になったんだ？」

「じゃあお兄ちゃん？」

「……生憎と俺は一人っ子だ」

なんだか突っ込むのも疲れてくる。それよりも言うことが山ほどあるはずだ。

「というか、知らない男が勝手に自分の部屋に入り込んでたら普通は不審がないか？」

「え？ あ……ど、どちら様でしょうか？」

「……お前は顔も知らない相手にご主人様と言うのか」

なにやら論点がかなりずれてきているが、この際気にしないでおう。気にするとますますややこしくなりそうだからだ。

やれやれ首を振るとため息を吐きながら宗助は自己紹介を始めた。正直、宗助の疲労はこの時点でピークだった。

「俺の名前は長門宗助。今日からここに住むことになった」

「あう、長門……宗助さんですか？ となると雪さまと何か関係がある？」

「ああ、俺は祖母さん……長門雪の孫にあたる。ちなみにだが俺の祖母さんは先日死んだ。その時に財産分与で俺にこの屋敷が与えられたというわけだ」

「そうですか……。雪様がお亡くなり……」

目の前の少女は宗助の祖母の死を悲しむと手を合わせてその死を悼んだ。内心、幽霊が死んだ人のことを悼んでどうする！？ なんて思ったが、この際ツツコミはなしだ。

「で、俺の自己紹介が終わったところで聞きたい。お前は誰だ？」

「あう！ そ、そうでした。自己紹介がまだでした！ 初めまして

です！ 葉月は、葉月は……ええ、と……誰でしょうか？」

「知らねーよ！！」

「き、記憶喪失です！ どうしましょうか！？」

「……どうしましょうか」

ピークだった宗助の疲労は今や限界突破を果たしすでにクライマックスへと突入していた。

「……というわけです」

「……というわけって……何も説明してねーだろーがあー！！」

宗助はなぜか部屋に置いてあったちゃぶ台をひっくり返して叫んだ。

「ひいい！ だ、だって、本とかには「……ということだ」とか「かくかくしかじか」とかで通じますですよ。なのにこの世界ではそれが通じないですか！？」

「世界言うな。生憎となこの世の中はそんなご都合主義でなんか出ていないんだよ。で、だ、そんなことはどうでもいい。それよりも、お前は一体誰なんだ？」

「あうう……先ほども言いましたが自分が何者なのか覚えていないんです。一応、名前としては葉月という名前を雪様から頂きました。それ以上のことはなんにも……」

「ふーん、ま、説明はかなり不十分だが大方のことはわかった。それでお前がここに理由はどうしてだ？」

「それが……」

と言つて葉月は自分の足についている足枷を宗助に見せた。

「それは？」

「……これが何なのか葉月にもわかりませんです。気がついたときには足にこれがついていましたから」

葉月の足についている足枷は見るからに重厚で簡単には外れそうには見えなかった。足枷から伸びる鎖はどこにつながっているのかはわからないが、とても長くその先は壁の向こうまで続いているよ

うだった。

「雪様がこのお屋敷をお建てになったときから葉月はここにいます。最初、雪様は葉月をなんとか成仏させようとしてくださいましたがこの鎖があるから葉月が成仏出来ないとおっしゃっていました。それに鎖のせいでこの屋敷から出ることさえも叶いませんでした。それを知った雪様は葉月のこの鎖を解こうと尽力を尽くしていただきましたが、雪様でもこの鎖を解くことは出来ませんでした。それで行く宛てのない葉月を雪様はここに置いてくださったということです」

葉月は宗助がひっくり返したちゃぶ台を直しながら話を続ける。

「雪様は記憶すら失っていた幽霊の葉月をとても大事にしてくださいました。この世の中のことを話してくださいたり、自身の話もしてくださいとそれは楽しいひと時でした」

葉月は遠い記憶を懐かしむような顔で話していた。宗助はそんな葉月の横顔を眺めながら不謹慎にもその横顔を美しいと思っていた。って何を考えてるんだ俺は……。出来るだけ葉月に悟られないように顔を背けながら葉月の言葉に耳を傾ける。

「しかし、雪様がお亡くなりになられたとは……。先日、雪様が葉月にお別れを告げに来たと言われた時はどういふことかわかりませんでした。そういうことでしたか」

「……大往生だった」

「……きつと最後まで笑っておられたんでしょうね」

「……ああ、最後まで笑っていたよ」

宗助の言葉に「そうですか」と呟くと、葉月は鎖をチャリと鳴らしながら宗助に代わりのお茶を出した。

「それでお前がこの家の管理人をやっているってわけか」

「はい、雪様は大事な用があるからといってこの家を離れることになりました。その時ですが、雪様はこんなことをおっしゃっていました。“いつになるかはわからないけど、そのうちあんたを成仏させてやる人間が現れる。その時にはそいつとよろしくやりな”って

「どういうことでしょうか？」

「……あんのババア」

「そういうことか、これでなんとなくだが全ての辻褄があつたような気がする。つまりは……」

「してやられたってことか」

「？」

「いや、気にするな」

諦めたように呟くと宗助は葉月の淹れたお茶を飲んだ。

案外、美味い。幽霊の淹れるものだからと不安を隠しきれなかったが、正直、自分で淹れるものより美味かった。

「それでなんですけど……」

「ん？なんだ？」

「えと、あなた様のことをなんとお呼びすればよろしいでしょうか？」

「どういうことだ？」

「雪様が葉月にお別れを告げに来た際に“近いうちにそこに新しく住人が増えるからその時にはそいつの世話をしてやってくれ”と言われまして、その方のお世話をすることというのは私のご主人様になるということですから、お呼びするときはご主人様がよろしいのかと思ひまして。もし、ご希望であれば旦那様やお兄ちゃんとお呼びすることも出来ますですよ。葉月はその為に勉強しましたから」

「なんの勉強だ！？ とは聞かなかつた。机の上においてあつたご主人様とお付き合い第八章を見れば大体のことはわかつたからだ。」

「……普通に宗助でいい。様付けもいらない」

「では、宗助さんでよろしいでしょうか？」

「ああ、それでいい」

「わかりました」

言つと、葉月は深々と頭を下げて一言、

「ふつつかものですが、今後ともよろしく願ひします。宗助さん」
「……」

こうして、宗助は葉月と出会った。

この先、葉月と出会ってしまったせいで宗助の身に色んな災難が降りかかるが、この時の宗助はそんなことまだ知る由もなかった。

「それでは、まずはご主人様にご奉仕を……」

「何のご奉仕だ!!」

宗助のこれからは前途多難なようだった。

「宗助さん、洗濯物が溜まっていたら出しておいってくださいね」

「宗助さん、お台所の洗剤が見当たらなかったので帰りに買ってきてください」

「宗助さん、今日は和食と洋食どちらがいいですか?」

……なんだこれは?

宗助の胸に去来したものはこの現状がよくわからないということだけではなく、どうしてこういうことになったのだろうか? という疑問だった。

のんびりとした朝、いつものように規則正しく目覚め「ふわああ」とあくびをしながらリビングのある階下に降りてみると可愛らしいフリルのついたエプロンを着用した(巫女服は標準装備)葉月がパタパタと走りながらもとい、走っているように浮かびながら忙しなく働いていた。

「あ、おはようございます宗助さん」

「おはよう、葉月」

なぜかエプロンを纏っている葉月にそれをどこから用意したんだ? と言いたいのをぐっと堪え軽く朝の挨拶を終えると、ご丁寧にテーブルの上に置いてある新聞紙に手を伸ばす。

「相変わらず世の中は平和だな」

そんなことを呟きながらのんびりと朝のひと時を過ごす。
すると、

「ふん、ふふん、ふーん」

とてもご機嫌な様子で葉月があちらこちらへと駆けていた。

「……」

新聞を読む手を止め、テレビのリモコンに手を伸ばし、いつものようにテレビを点ける。テレビの向こう側では雨の中だというのに満面の笑みを浮かべたお天気キャスターが元気にリポートしていた。「あっちも元気ならこっちも元気だな」

聞こえたのか聞こえていないのか知らないが葉月は「忙しいですね」と言いながら家事に精を出していた。

どういうわけか葉月は幽霊のくせに物に触れることが出来るらしく、雑巾を片手に窓をきれいに磨いていた。宗助の目の前では掃除機が勝手に動いていて、奥のキッチンでは包丁やら食器類が浮かびながらまるで意思を持っているかのように自由自在に動き回っていた。

一言で言えば童話とか絵本の中の世界、現実において考えてみればそんなことが起きるわけではないし、あつたとしてもせいぜい掃除機が勝手に動くぐらいのものだ。

葉月は自分の能力、つまりはポルターガイスト現象を使って家事をしていた。

こんなもの他の人間に見られたなら発狂するか、霊媒師を呼ぶかするものだったが、とりわけ宗助はこういったことに馴れており、それを実行している人間も目の前で忙しそうにしているのを見ていため別段何かを言うようなことはなかったが、やっぱり現実にくいういうことを行われると正直どう対処していいものか、という気持ちになった。

「宗助さん、早くしないとご飯冷めちゃいますよ」

「あ……ああ……今行く」

と宗助を呼ぶ声が一つ、

のっそりとソファから立ち上がるとダイニングに向かう。その間にキッチンのほうから腹の空くようないい匂いがこれでもかというぐらいに漂ってきていて余計に鼻腔をくすぐる。

ぐう、となるお腹はとても正直で腹が減っては戦が出来ぬと

いうことを体で表しているかのようにだった。

それにしても、どうしてこうなったのだろうか？

まあ、一言で言ってしまうえば自分で同居を認めたのだから彼女に文句を言うのはお門違いだというものだ。それは頭の中でわかるのだがそれにしてもこんな新婚さんみたいな状況になるなんて思っても見なかった。

「宗助さん、今日はいいい天気になりそうですね」

「……」

「あ、宗助さん、今日のは腕によりをかけて作ってみました」

「……」

宗助は黙る他無かった。

とりあえず、文句というか言いたいことは山ほどあった。ただそれを言ってしまうと機関銃のように溢れ出すのは一目瞭然なものと、せつかく作ってくれた朝ごはんが冷めるのがいやだったのも手伝ってそれを言うのをぐっと堪えた。

が、

「はい、宗助さんはご飯これぐらいでよかったですか？」

「……ああ」

何気なく返事をしてしまったがそれを流してしまうほど宗助は甘くは無かった。

「なあ、ちよつといいか？」

「はい、なんでしょうか？」

「色々といいたいことがあるんだが、きつとそれを言つとキリが無
いから敢えて一つだけ言わせてくれ」

「はい？」

「何やってんだ？」

「え？ ご飯を盛り付けてますど……あ！ も、ももしかして、朝はパンのほうがよかったでしょうか？」

「いや、俺はご飯派だ。じゃなくって、なんでこんなことをしてるんだ？と俺は言いたいんだ」

「え？ 何か粗相をしましたでしょうか？」

「粗相もなにも、お前は幽霊だろう。なんでこんなことをしてるんだ？」

その宗助の質問に葉月は返答に困っているようだった。

「第一、俺はこんなことをしてくれと頼んだ覚えはないし、される理由も無い」

「はううう……」

葉月は目に見えてわかるほど落ち込んで見せた。そんな姿に少し罪悪感を覚えはしたものの、それでもなんでこんなことをしているのがまったくわからない以上追求の手を緩めることは出来なかった。

「何でだ？」

出来るだけ優しく言っているつもり（本人はそう思っている）だが、側からみればどこからどう見ても一方的に尋問しているようにしか見えない。

「……宗助さんはこういうのはいやですか？」

「は？」

「いえ……せつかくこうしてお側に置いていただいているのに何もしないわけにはいかないと思ひまして、こうして宗助さんの身の回りのお世話をさせていていただくことでご恩返しをと思ひましてです」

「ご恩もなにも成り行きでこうなっているわけなんだから別に普通にしててもいいと思うぞ。それに俺はこういうことをされなくても大抵のことは一人で出来るし、お前だっていやだろ？」

「え？ い、いえそういうことではないですけど……」

「俺の祖母さんが俺の為に世話をしてくれって言い残したのかもしれないけど、別に俺はそこまでしてもらうことはない。それにお前との付き合いもその鎖が外れるまでだしな」

「そうですか……」

殊更寂しそうに宗助のご飯をそつと置くと葉月はその場だけに影

が差したかのようにずーんと暗くなった。

「……」

「……」

「……」

「……」

「あのさ」

「……はい」

「そこでそんな風にされているとご飯が食べ辛いんだが……」

「……いえ、葉月のことは放って置いてください。葉月のことはいないものと思つて食べてください。あ、でも、幽霊なんだから最初からいないも同じですよ。あはははは……」

「……」

ずず、と味噌汁をすすする音だけが響き、この場が明らかに尋常じやなくくらいに静かだということを知らしめられる。

葉月は葉月で「葉月なんてただの幽霊ですから……」気にしないで下さい……」とぶつぶつ呟いているし、対する宗助は出来るだけ気にしないようにご飯を黙々と食べようとする。

そうすること五分、もちろん、二人の間に会話なんて無い。

宗助は温かいご飯食べながら思った。

面倒くせえ……と、

しばらくお互いに黙っていたが、この現状に耐え切れなくなった宗助が観念したかのように首を振った。

「ああ、わかった、お前のしたいようにすればいい。俺もこれ以上は何も言わない。ま、お前とのこの生活もその鎖がなくなるまでだ。それまでは好きにすればいい」

「ほ、本当ですか！？ 宗助さん！！」

「ああ、だが、その鎖がなくなるまでだからな！！わかったか？」

「はい！」

どこからどう聞いてもぶっきらぼうな言い方にしか聞こえない言い方だったが、葉月はそれをまったく気にすることも無くぱつと顔

を上げるとまるでお日様が差したかのように明るい笑顔を取り戻していた。

本当になんか調子狂うな……。

宗助のそんな思いは温かい味噌汁と炊き立てのご飯を前にすると知らぬ間にどこかへ消えてしまった。

シーン2 Gショック 黒いあいつの襲来

シーン2 Gショック 黒いあいつの襲来

なし崩し的に始まった葉月との生活だったがこれが大変だった。
葉月はこういうわけか幽霊のくせに怖がりなようで何かあれば「宗助さん!!」と飛んでやってくるのだ。それも泣き顔で。

その度に今度はなんだ? と思いつながらもその重い腰をあげる。

「そーすけさん!! 助けてください!!」

「……今度はなんだ」

リビングのソファーに腰をかけて平和な日常を過ごそうとしていた宗助だったが、今日もやっぱりか……と言いたげな顔を浮かべながらゆつくりとその重い腰をあげた。毎度のごとく同居人である幽霊がどたばたと騒ぐのも宗助にとってはもはや日常になりつつあった。

「宗助さん宗助さん! 奴が出ました! 奴が……奴があ!!」

「うるさい!!」

「あうう!!」

絶対に美少女がしてはいけない顔をしながら、全力でこちらに向かつてこようとすることを脳天割りで制する。それにしても、こういうときばかりはこの力も捨てたものではないなんて思う宗助だった。

「そ、宗助さん……葉月のことお嫌いですか?」

「もう少し言動がまともならミジンコに対するぐらいの興味は持てるかな」

「……じゃあ今はどのぐらいの興味なんだろうかね」

涙目で抗議してくる幽霊を無視しながら話を戻してやる。

「……で、何が出たんだ。幽霊か?」

「あう! 幽霊さんが他にもいるのですか!? どこですか、どこ

にいるのですか!? それならば一刻も早く成仏していただかなくては! なぜならば、他に幽霊さんがいらつしやると葉月が宗助さんとキャツキャウフフ出来なくなってしまうです!!」

「……まずはお前から成仏させたほうがいいよな絶対」

宗助は一気にげんなりした。しかし、放っておいてもろくなことにならないことを既にその見に感じている宗助は、じたばたあたふたと忙しそうに動き回るバ力を制するとようやく本題に入ることが出来た。

「それで朝から騒々しく騒いでいるけど一体何があった?」

「ああそうでした! こんなところでキャツキャウフフしている場合じゃありませんです! 出たんです奴が!」

「ああ、わかった、わかったから離れる! 顔が近い顔が!」

こちらがわずかでも隙を見せようとすれば目の前の幽霊は一気にこちらへと接触を図ろうとしてくる。それはまさに乗り移ってやるうかあ!? とでもいいいたげなぐらいの勢いでちよつとばかり怖い慌てふためく葉月をなんとかなだめ、深呼吸するようにすすめる。
「はあく、ふうく、はあく、ふうく　　ごほつごほつ……すいません……むせました……」

「……深呼吸も落ち着いて出来んのかお前は……」

ジト目で横の幽霊を見やる。よくやく落ち着いたようで呼吸を整えていた。少なくとも、幽霊に深呼吸が必要なのかどうかは怪しいが……第一、すでに死んでるし。

そんなことをどうでもいいことを思いながら葉月の言葉に耳を傾ける。

「宗助さんと話していると時間が経つのも早いですね」

「……お前が話をややこしくしてるんだろうが。で、何が出たんだ?」

「Gです! Gが出たんです!」

「ああ! だから顔が近いって!」

グイグイと顔を寄せてこようとするのを必死で引き剥がしながら

話の続きを促す。

「ところでGってなんだ？」

「…… Gとはかつてこの世界に降臨した悪の帝王です。その姿は漆黒の闇よりも黒く、その理想的な体つきはいかなる狭い場所にも入り込むことができ、その脚力はどんなアスリートよりも早く、その動きで歴戦の勇者たちの攻撃をかわし、なおかつその圧倒的な存在感で相手に戦う気を失わせる。そして極めつけは飛びます！ 奴は自身の身に危険が迫ったときにその身をもって体当たりをかましてくるんです！」

「……つまりはゴキブリが出たってことか」

「ああああ！ 宗助さん！ その名を、その忌まわしい名を口にしていけません！ こうしている間にも奴は葉月たちにどんな攻撃を仕掛けてやるうかと虎視眈々とその機会を窺っているはずです。ほら、今もその隙間からこちらを窺っているに違いありません！」

「だからなんで寄ってくるんだ！」

軽く小突きながら引き剥がしてやる。葉月が密着するたびにその……なんていうか柔らかいものが……ふにふにと当たって……なんともいえない気分になりそうになる。つーか、幽霊のくせになんでこんなに柔らかいんだろぅな……。

「宗助さん、これは我々人類と奴らとの戦争なんですよ。生きるか死ぬか二つに一つ。奴らを倒さなければ我々に未来はないんです！」

どうでもいいことをもつともらしく講義するが、どうにもバカらしくて聞いていられなくなる。たかが、ゴキブリ一つで何をそこまです……。

「んで、どこにいるんだ？ そのゴキ……じゃなかったGとやらは危うく奴の名を出してしまうところだった。ここで奴の名を出してしまったらまたこの面倒くさい奴が騒ぎ出すかもしれない。そう思うと迂闊に名前を呼ぶことさえ憚られた。実際に危うく名前を呼びそうになると葉月にキッと睨まれてしまった。そこまで怖いのだろうか……。

「Gはですね今キッチンの冷蔵庫の奥に潜んでいます。先ほどお料理をしようと思って近づいたら奴がその後ろに隠れるのを見ましたですから」

「ふーん、となるとGをおびき出さないと倒せないということか」

「ええ、奴はとても狡猾で中々姿を現さないです。なにより人の気配に敏感で人が来たとかると一目散に隠れてしまいます。ゲームに出てくるメタル系モンスターよりも厄介です」

「まあ、メタルなんかを倒せば経験値が跳ね上がるんだろうが、生憎とGを倒しても大した経験値は手に入らないと思うぞ」

「それはわかっています。しかし、葉月にとっては経験値よりも奴がこの家に存在していることが我慢ならないのです！」

葉月にしては珍しく攻撃的な発言だと思った。何がそこまで彼女を奮い立たせるのだろうか。

「ま、それはいいとして、対策はあるのか？」

「はい、それは抜かりなく。これをご覧下さい」

そう言って一つの紙を取り出した。いや、正確には紙というよりは紙の束だった。

「これは？」

「新聞紙ですよ宗助さん」

もはや質問するのもどうかと思うが、何も質問したのはその物体に対してではない。それで一体何をしようかということに疑問を感じたのだ。

「いや、それは見ればわかる。見たまんま新聞紙だな。そうじゃないとこの新聞紙を使って一体何をしようっていうんだ？」

「え？ いやですね、宗助さん。これは奴らと戦うために作り出された兵器、つまりは我々にとっての希望になるんですよ」

「……希望？」

うーん、よくわからない。まあ、こいつの言うことはいつもよくわからないことばかりなのだが、今回ばかりは輪をかけてさっぱりだった。

不思議そうな顔で見る宗助を置いて葉月はその新聞紙をくるくると丸めだした。

「出来ました！　これが我々の切り札、SBS - 01です！」

「なんかものすごく格好いい名前だな！」

ババーンと効果音がつきそうなぐらいにSBS - 01（新聞紙一号の略らしい）高々と掲げ威厳たつぷりにポーズをとっていた。その姿はまるで勝利の女神が旗を掲げて民衆を引き連れているあの有名な絵画のようにさえ見える。

「で、そこからどうするつもりだ？」

「……」

掲げたまま固まっている葉月。もしかして、この後の展開をまったく考えていなかったのだろう。ま、普段の言動があれな葉月ならありえる。そう思っただけ息をついた。

しばしの逡巡の後、葉月は「どうぞ宗助さん」と、うやうやしくSBS - 01を宗助に手渡してきた。

「……どうのことだ？」

「それはですね、宗助さんにGを退治する重大な任務を与えようと思ひまして」

「……だからってなんで俺なんだ？」

「……えへへ、だって怖いんですもの」

すば　　ん！！

「あうう！」

ゲームだったら間違いなくクリティカルヒットものの一撃を繰り出してやる。材質が新聞紙で出来ているせいか、一撃を繰り出したときのヒット音がやたら小気味よく感じられた。

「何言っただ！　お前が用意したんだっただらお前がやれ！」

「後生です！　後生ですから　！　なんとか葉月の、いえ、人類の平和をなんとか守ってください！！」

「スケールがでか過ぎんだよ！　なにゴキブリ一つでそこまで怖がってんだよ！」

「ああああ！ 宗助さんその名を口にしてはあ！！」

飛びついてきた葉月に反応できず、そのままだれ込むようにして床に転がってしまった。それはまさにアクション映画なんかで敵の攻撃をかわそうとして仲間を助ける主人公のような動きだったが、実際にはそこまで格好よくはない。

その拍子に葉月とかなり密着してしまってさっき迫ってきたときよりも顔が近かった。それはもうあと数センチでお互いが触れ合ってしまうぐらいの距離だった。

「っ
っ」

お互いに自分たちの置かれている状況を理解し、とっさに離れる。そして何事もなかったかのように振舞おうとするのだが、どうにも心臓がバクバクと鳴っていてどうしようもない。

「……そ、それでですね……引き受けてもらえますでしょうか？」

「え……あ、ああ……わかった。何とかするからお前はどこか安全な場所で待つてろ」

「はい……」

なんか微妙な空気のままよそよしく距離をとる。

……なに意識してんだよ俺は。なんとなく自分で自分を殴りたくなつた宗助だった。

「えーっとそれでどこにいるんだ奴は」

独り言を呟きながら宗助は今や戦場と化したキッチンへと足を踏み入れる。

ゆっくりとゆっくりと、自分自身の気配を最大限に殺しながらGが潜んでいそうな場所へと向かう。

片手にはSBS-01、葉月いわく人類が奴に対抗できる最後の希望らしい。

「……それにしても面倒なことになったな」

やれやれと頭を掻きながら宗助は自分の甘さに落胆しそうになる。一つだけ反論させてもらうが決して葉月とあんなことになつたか

らじゃないぞ。早く奴を退治しないとまたギャーギャー騒ぐからだ！　それだけだからな！　とは宗助の言だ。

そんな彼の心情はともかくとして、宗助は先ほど葉月が言っていた冷蔵庫の隙間を覗いて見る。さすがにあれから時間が経っているせいで奴ことGはすでにその場所から姿を消していた。

どこに行った？　奴の移動速度は尋常ではないが、あれだけの時間だったらまだどこかに潜んでいてもおかしくはない。

冷静に分析を繰り返しながら宗助はくまなくGが隠れそうな場所をそれこそ風つぶしに探していく。

けれども、その姿は一向に見つけることは出来なかった。

諦めてその場を離れようとする「あううう！」と、リビングのほうから聞きなれた叫び声が聞こえた。

一目散に声のしたほうへと足を向けると、葉月が黒い物体に追い掛け回されていた。

「……大丈夫か？」

「そ、そそそそ宗助さん！　助けてください！　奴が、奴が葉月を狙ってます！」

「見ればわかる。それよりもなんか楽しそうだな」

「楽しくなんかいいですよ！　なにを見てるですか宗助さん。早く助けてくださいです！」

「助けろつつつてもな……そう飛び回っていたんじゃ退治しようがないぞ」

確かに宗助の言うとおり、地面に止まっている物体ならばともかく、飛び回っている物体を叩き落すというのはかなりの技術が必要となる。物理的に考えてその飛行している物体よりも速い速度でなければその物体を叩き落すことは出来ないし、何より相手が自由に動き回るならばなおさらだ。どう考えたって無理な話だ。

しかし、宗助はやれやれといったものように首を振ると手にしていたSBS-01を握り締める。

そして……。

すぱ　　ん！と小気味のよい音が響き渡る。ついでに「あうー！」という声までついてきた。

飛び回るGを狙ったつもりがどういいうわけか葉月のほうにヒットしてしまっただけらしい。

「　　ちっ、仕留めそこなっただけ」

「そ……宗助さん……それは葉月のことでしょうか……」

今にもあつち側へと逝きそうな葉月をよそに宗助はもう一度S B S - 01を振る。

パシィ！

「ひいー！」

ビュンッ！

「ひゃうー！」

ビュオン！

「ノオオオオオ！」

「すばしっこい奴め。じつとしてろ！」

「嫌です！止まったら葉月は殺されちゃいます！」

「大丈夫だ。お前はすでに死んでいる。だから何も気にするな！」

「気にしますですよ！　死に方がひどい！　とかあべし！　とか嫌なですよ！」

もう二人にとってはなにがなんだかわからなくなっていた。宗助もといGに追われる葉月、その葉月もといGを仕留めようとする宗助、互いに本来の目的なんか忘れて走り回っていた。

そこから一時間後……。

「　　はあ　　はあ　　はあ　　はあ　　」

「　　ひゅー　　ひゅー　　うー　　うー　　」

大の大人が二人そろってリビングで仰向けで倒れていた。

「　　なあ　　俺は一体何をやってるんだろうな……？　せつかくの休みだったのに……」

「……それは葉月も……同じです……結局……奴を逃がしてしまい

ましたです……」

せつかくの休日が何をしていたのかよくわからないまま過ぎていく
こうとしていた。

「……うおおお……体がいてえ……つか、レポート仕上げなきゃい
けないのに……」

「……そ、宗助さん……ファイトです……ううう……」

そしてその日は二人揃ってぐったりしたまま過ごすごととなつて
しまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1465ba/>

俺と半透明な彼女の日常

2012年1月5日21時48分発行